

小田実全集（小説 第34巻）

暗潮 大阪物語／玉碎



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

暗潮——大阪物語——

暗潮 あとがき

玉碎

197

193 5

暗潮

あんちよう

大阪物語

声はいつも闇のなかでした。

「千登世」と呼ぶときもあつた。

「チイちゃん」と言うときもあつた。

「千登世」と呼ぶ声は威圧的だつた。

「チイちゃん」の声は甘美であつた。

「千登世」の声は兄の健太郎の声だつた。

「チイちゃん」の声は正次のだ。

正次は筋むかいの荒物屋の息子の正次だ。弱虫、アカンタレの正次。

戦争ごつこで、いつもチャンコロのようにやられてばかりいた。ほかの誰かにころがされ、組み敷かれ、泣きベソをかいた。幼稚園でいじめられてばかりいる弟の文雄までが、その正次を見て笑つた。

ショウジ、ショウジ、弱虫、チャンコロのショウジ。みんなははやしたてた。はやしたてるみんなは二ホンダンジだつたが、ときには千登世のようなヤマトナデシコも仲間に入った。ショウジ、ショウジ、弱虫、チャンコロの正次。みんなといっしょにはやしたてていると、千登世はいつも何かたかぶつた気持になつた。千登世のおとうさんは大人しい人だつたが、ときたま酔っぱらうと、「矢でも鉄砲でも持つて来い。わしは負けんぞ」と大声で叫び出した。千登世はそのときのおとうさんが大嫌いだつたが、みんなとはやしたてていると、(ヤデモテッポウデモモツテコイ、ウチハマケンゾ)、そ

んな気持になった。そのうち心のなかでおとうさんのように大声で叫び出していた。

もう小学校は卒業して同じ小学校の高等科に入っていた健太郎はそのころにはとつくの昔に戦争ごつこのような子供の遊びを卒業していたが、それはそれだけ一人前のヤデモテッポウデモモツテコイ、ワシハマケンゾのニホンダンジになつていたことだ。

千登世にニホンダンジのことばの意味を覚えてくれたのは健太郎だった。ニホンダンジは、ただの日本の男ではない。チャンコロやチョウセンはもちろんのこと、西洋人のケトウにも負けないから、彼らに勝つからニホンダンジだ。だから、弱虫の、チャンコロみたいに弱虫のショウジのような男の子はニホンダンジではない。あんなのはチャンコロだ。千登世のおとうさんは大人しい人だったが、ああ見えても軍隊にいたときは肩章に三つ星をつけていた上等兵だったのだから、立派にニホンダンジ——それこそヤデモテッポウデモモツテコイ、ワシハマケンゾのニホンダンジだ。日本の軍隊は負けたことのない軍隊だ。負けることのないニホンダンジの集まりだから日本の軍隊は負けないし、負けない軍隊にいるのだから、ニホンダンジは負けない。そうしゃべっているうちにも意気あがつて来た健太郎に千登世が「兄ちゃんもニホンダンジやろ」と訊ねたのは、やはり、兄にいい顔をしたい気持があつてのことだ。そう妹に言われて、健太郎は満足げに笑った。「そうやで」と彼は声を大きくした。「おれもニホンダンジや。」そう大声でつづけながら、コクラの学生服の胸のあたりをゴリラのように叩いた。千登世はそんなゴリラの動きを天王寺の動物園で見たことがあつたが、「兄ちゃん、ゴリラみたいやで」とは言わなかつた。そんな失礼なことは言えないととつきに思つていた。それはニホンダンジにふさわしくないことばだった。代りに、「そんなら、うちは何」と千登世は兄に訊ねた。困つ

たように、健太郎は妹を見た。「うちは女やろ。ニホンダンジは男やろ。女とちがう。」千登世はつぶけた。まぜ返しているつもりはなかった。千登世は真面目に訊ねていた。

「おまえはときどききつい口のきき方をする。男の子みたいや」と千登世はときどき母親に言われた。そんなとき、きつと千登世の口はとんがっている。カガミで見たことはなかったが、母親がよくそう言っていたので、たぶん、そんなキツネのような顔をしているのだろうと自分でも思っていた。今も、千登世の口はとんがっている。千登世は自分でその自分の顔を思い描いた。

困惑しきつた顔でしばらく黙り込んでいた健太郎の表情に一瞬明かりがともったようにいきいきとして見えたのは、彼が次の瞬間にニホンダンジに符合することばを思いついたからだだったにちがいない。「おまえはヤマトナデシコや」と彼は元気よく言った。

「ヤマト……」

千登世がその聞き慣れないことばを訊ね返すと、健太郎はかすかにヒゲがまわりに生えかけた口で「ヤマトナデシコ」とくり返し、「日本人は男はみんなニホンダンジ、女はヤマトナデシコ」とうたい上げるように言った。彼はそのことばをうたい上げたばかりではなかった。「ええか、千登世、判ったか」とつぶげながら、いつにないこわい眼つきで千登世をにらみつけた。眼に力が入っていた。千登世は黙つてうなずいた。「ニホンダンジは強いや。」そのあと、表情を和らげて健太郎はつぶけた。「ヤマトナデシコは……」と言いかけて彼は口ごもり、そのあとまたうまいことばを彼は見つけ出していた。「やさしい。」

その強い、チャンコロやチョウセンはもちろん西洋人のケトウにも負けないニホンダンジの健太郎

が闇のなかで「千登世」と呼んだ。

こわい声だった。上から千登世におおいかぶさつて来る、有無を言わせぬ強さがあつた。それにくらべると、弱虫、チャンコロの正次の声は、同じ闇のなかの声でも、もつとやさしかった。やさしく、からだ全体にねっとりねばりついて来た。

ニホンダンジとチャンコロの声は、声の種類はまったくちがつていたが、同じことを言った。

「千登世、脱げ。」

ニホンダンジが言った。

「チイちゃん、脱いでエな。」

チャンコロが言った。

どちらも闇のなかでのことだ。それからは闇のなかでの手の動きだった。ことばはもうなかった。闇のなかで手だけが動いた。

自分の手の動きなのか、それともその手がいったんは激しく撥ねのけようとした、しかし、そのうちためらいながら自分の手がいつしよに動いて行こうとする相手の手の動きなのか、よく判らなかつた。よく判らぬままで手は動き、千登世の下穿きはするすると脚を下方へさがつて行つた。千登世はただ黙つて闇のなか——そのころにはあつた物置き、闇のなかに突つ立つていた。

それからはニホンダンジとチャンコロ、二人のすることはちがつていた。

ニホンダンジは黙つて手を千登世のオシッコの出るところにあてがつてから、まえにかがみ込んだ。まつたくのくら闇だったし、もうそのときには千登世は眼を閉じて、何ごとも見まいとしていたから

よく判らなかつたが、オシッコの出るところに当てた彼の手の動きはそのまま指の動きになつた。そのあたりを指が丁寧に動き、まぎぐる。何んで彼がそうするのか、そうしたがるのか千登世にはまったく解せなかつたが、恥ずかしいこと、よくないこと、してはならないことをしているという気持が彼女にはあつた。彼がその恥ずかしい、よくない、してはならないことをしているのなら、彼女もしている。その気持があつた。それで、たぶん、千登世は眼を閉じていた。眼を閉じていれば、何も見えない。自分の姿も見えない。自分はどこか遠くへ行つてしまつていて、そこには——物置きの間になかにはいない。

もつとこわいことがある、こわいことをされるといふおそれも千登世は感じとつていた。それで全身がこわばつた。しかし、ニホンダンジ——健太郎のすることは、いつもそこまでだつた。ころあひを見はからつたように健太郎は千登世のオシッコの出るあたりから指を離し、手を離した。そのときになつて、いつもきまつて千登世ははじめて声を出した。

「兄ちゃん。」

そのあと何を言おうとしていたのか。「……そんなこと、したらいかん」と怒つた声を出そうとしていたのか、「……もう少ししてもええ」と他人ごとのようにつぶやこうとしていたのか、自分でもよく判らなかつたが、どちらにせよ、あと、ことははつづかなかつた。

「兄ちゃん」は彼女の呼びかけに答えなかつた。二人がさつきから隠れていた物置きの扉を少し開いて、そこにでき上つた小さなすき間から大柄なからだをすり抜けさせるようにして外に出て行つた。敏捷な動作だつた。健太郎が出たあと、小さなすき間から光が一すじ入つて来た。その光のなかで千

登世は慌てて足もとまで引きずり降ろされた下穿きをもとの位置までずり上げた。下穿きは、千登世の好きなコグマのコロスケがお尻のところプリントされた下穿きだ。いつもとはかぎらなかつたが、たいていはそうだった。

チャンコロのすることはちがつた。コグマのコロスケの下穿きを足もとにひきずり降ろすところまではいつしよだった、あとはちがつた。チャンコロは小さな懐中電燈を持っていた。

「チイちゃん。」

と彼はやさしく言い、そのあとを、

「見せてエな。」

とやわらかくねばりついて来る声でつづけた。そして、そうつづけながら、正次は千登世のまえにかがみ込んだ。

千登世はそのときには眼を閉じなかつた。彼女のまえにかがみ込んだ、そして、小さな懐中電燈を握りしめながらそのかぼそい光を同じオシッコの出るあたりに当てようとして懸命になっているチャンコロの正次を大きく眼を見開いて見おろしていた。

「弱虫のチャンコロ。」

彼女はくり返した。

「弱虫のチャンコロ、チャンコロ、チャンコロ。」

あれからまだ二年ほどしか経っていないのに、千登世の世界は一変して見えた。

物置きはもうなかった。お店の改造で、階下の店と居間の中間にあつた物置きは姿を消してしまつたのだ。それはあの「千登世」、「チイちゃん」の声で始まつていろんなことがあつた、いろんなことが行なわれた闇の世界が消失してしまつたことでもある。

あのころ三年生だつた千登世はもう小学校五年生になつていた。あの年高等科の二年生だつた健太郎は五十人にひとり合格するというむつかしい試験に受かり、今は念願の陸軍の少年飛行兵にいつて、東京の近くのどこだつたか、千登世の知らない遠い都市へ行つてしまつた。そこで今は少年飛行兵の学校に入つていて、日々「飛行機乗り」になるべく訓練に励んでいる。そう休暇で帰つて来たとき、健太郎はいかめしげに千登世に言つた。カーキ色の軍服の襟に赤襟章がついていた。台座だけで、星も金筋もついていない襟章だつたが、健太郎は「これ、赤たんと言ふねん」と誇らしげであつた。「たんざくみたいやろ。赤いたんざく。だから、赤たん。」手品の種明かしするように健太郎は笑いながらつづけた。そして、胸には、翼をピンと左右に張つたかたちの航空徽章。こちらがどんなものかは、千登世にも説明されないでも判つた。「もうすぐ飛行機に乗る。」健太郎はピンと背筋を伸ばして、りりしい顔で言つた。「そのうち、うちの家の上にも郷土訪問飛行で来るかも判らへんで。」彼はその顔でつづけた。「いや、ほんまに来る。」

健太郎はもうまつたく物置きの闇の世界には縁がなかつたような顔をしていた。そのりりしい顔で、

そんな昔のことを考えるのはできないことだった。「千登世、おまえもお国のためにつくすんやで。」りりしい顔はそう話にしめくりをつけた。「ハイ」と千登世は千登世にしては珍しく素直に大声を出してうなずいた。「文雄もそうやで。」健太郎は弟の文雄にも言った。「ハイ」と幼稚園の二年目の文雄も勢いよく返事をした。「この子はまだ兄ちゃんの言うこと何んにも判つてへんのやで」と千登世は言いたくなつたが我慢して黙っていた。「ハイ、ハイ」と文雄は面白がつてくり返した。

正次——弱虫、チャンコロの正次は、あのころ六年生だったのが、今は商業学校の二年生だ。「よう入りはりましたな」と言う人と「よう入れはりましたな」と言う人がいた。正次の入つたのは市立の商業学校で、入学試験がむつかしくて、たしかに入るのがたいへんな学校だった。正次はたしかによく勉強したので試験にうかつたのにちがひなかつたが、それでは正次はそれこそ物置きの闇の世界でいろんなことをやってのけながら勉強していたことになる。いまだに正次のことで「あの荒物屋の息子はん、よう入りはりましたな」と言う人がいたりすると、千登世はいつも物置きの闇の世界のことを思い出した。

「よう入れはりましたな」は、もう少し長く言うと、「荒物屋はん、よう息子はんを商業学校に入れはりましたな」になる。本来なら、荒物屋はんなら、息子を小学校の高等科にやつてもよかつたのだ。いや、それがふつう考えられたことだ。千登世のおかあさんがときどき誰かとしやべつてるときにそんな言い方をした。「無理しはつたみたい」とおかあさんは同情するように言つたが、それは「無理せんでもよかつた」と言っていることでもあつた。おませな千登世はそんなふうにおかあさんのことを聞いていた。

健太郎の少年飛行兵になった経緯は千登世にはよく判らなかつた。「中学ぐらい、うちでもちゃんといかせましたで」と千登世のおかあさんはきかれもしないのによく人に言つていた。ことに正次の「よう入れはりましたな」の話が出たときだ。健太郎が昔から少年飛行兵になりたがつていたことは千登世も知つていた。彼はよく口癖のように彼女にそう言つていたからだ。そのためにおれははじめから高等科に行こうと思つていた、高等科二年すんだら少年飛行兵に志願できるんやからな——とは健太郎が千登世に言つたことであつた。高等科に行くためにわざと府立の中学校の入学試験に落ちてやつたのだと彼はつづけて言つたが、おまえの兄さん、中学の試験にすべりよつたんやと千登世の耳に口を押しつけて低声で言つたのは正次だ。そして、高等科の二年生になつて、いよいよ少年飛行兵になると健太郎が言い出したときには、家じゅうが大騒ぎになつた。「そんな危ないことさせられませんかいな」とおかあさんがおとうさんにオロオロ声で言い、自分では健太郎に太刀打ちできないと思つたにちがいない。「健太郎によく言うてきかせてやつて下さい」と頼んだが、口下手のおとうさんに理屈ずきの健太郎相手にそんなことができるはずもなかつた。まず中学校へ行つたあとヤクセンに入り、正式に薬剤師の免状を取つて、ヤクセンも何も出ていないので免状がないのでカゼ薬などの簡単な売薬品しか売れないでいる父親の店をもつとちゃんとした薬局にして欲しいという父親の願ひは、「そんなことは文雄にさせたらええがな。ぼくは中学の試験にこのまえ落ちたんやで。おかあはんなんか、いつも文雄が頭がええ言うて自慢したはるやないか。おかあはんの言ひはる通り、文雄やつたら、中学の試験も一発で受かるし、ヤクセン行くのも問題あらへんで。おとうはんが授業料高いのを払わんといかんけどな。少年飛行兵の行く飛行学校やつたら、授

業料はいらんどころかむこうがお金くれはる」とおかあさんのことばを逆手にもとれば、おとうさんにもおしまいの「お金くれはる」を恩に着せたように言つてのけて、健太郎はことをかたづけた。おとうさんが「おかあさんが言うていることや」と代弁したかたちで口にした「飛行機に乗るなんて危ないことや」に対しては、健太郎は「飛行機はもうそんな危ないことうなつてるで。そんなこと言うたら時代おくれで笑われる。今日、^{きょうび}もうお客たくさん乗せて大阪から東京はおろか、朝鮮、満洲まで一日で飛んで行きよるんや」と言い返した。「そやけど、軍の飛行機はちがうやろ。空中戦なんかするんやないか」となのおとうさんがくいさがると、「日本男子はお国のために生命捨てんといかんのとちがうか。満洲なんかで、今、ようけ兵隊さんが死んでるやないか。もう今はジュンセンジタイセイの時代です。ぼくらみたいな若もんが生命惜しんでたら、日本はどうなります」と健太郎はいつになく雄弁にまくしたてた。そして、切り札は、「おとうはんかて、軍隊にいはつたやないか。上等兵にまでなりはつたやないか」だった。「そうやな」と千登世のおとうさんは曖昧にうなずいた。それはそれだけで健太郎の少年飛行兵志願を許したようなうなずき方であった。あとはうやむやにことは進行した。正面きつて許されたのでもないのに健太郎は少年飛行兵の募集に願書を出し、受験し、合格通知が来たときには逆に父親が大声を出してよろこび、健太郎が家を出る日、一家は大阪駅まで見送りに行った。健太郎の友達もいつしよに来て、プラットフォームで「万歳」を三唱した。「お国のためにつくすんやで」とおとうさんが最後に言い慣れないことばを口に出した。おかあさんはむつり黙り込んで何も言わなかった。

「じゃあ、行つて来ます。」列車の窓から顔を出して、いつにないあらたまつた口調で健太郎は言い、

まだコクラの学生服のままなのにいつぱしの兵隊さんになったように学生帽に手を当てて拳手の礼をした。

三

商業学校二年生の正次とは、千登世はときどき道で会った。しかし、もう正次は二年前のころのように、「チイちゃん」と親しげに呼びかけたりしなかった。それどころか、そつぽをむいてまったく見知らない人に出会ったようにして通り過ぎる。おかあさんにそのことを言うと、「あれは恥ずかしくがっついてはるんやで。男の子は年ごろになるとそうなりはる」とこともなげに言った。「女の子は？……」と千登世はことばを返した。「さあ、どうやら。あんたはこれから自分にきいてみたらよろし。」おかあさんは笑い返した。

そのころの正次のことで千登世がはつきり憶えていることがいくつかあった。ひとつはその年の夏にドイツのベルリンという都会であったオリンピックにかかわつてのことだ。オリンピックのあったのは夏休みのあいだのことだったが、秋の新学期になって、千登世の組の担任の中田先生がさかんに日本の選手の活躍ぶりについては教室でしゃべってくれていたので、千登世はまだよく記憶していた。タジマが三段飛びで勝つて金メダルを貰えば、棒高飛びでニシダが惜しくも優勝しなかったが、銀メダル。その代り銅メダルも日本の選手が貰った。そして、競技のおしまいの日の呼び物の馬拉ソンでは、日本のソンが一着、三着も日本で、日本人はほんとうに今度のオリンピックで鼻を高くしてよい。そして、もちろん、日本選手はお家芸の水泳で大活躍する。テラダが千五百メートルの自由型、ハム

ロが二百メートルの平泳ぎというぐあいに優勝を決めて、日章旗をたかだかとベルリンの会場に揚げたが、日本人の誰にとつても忘れられないのは、マエハタという女の水泳選手の二百メートルの平泳ぎでの優勝だった。中田先生は、ラジオでデンバという得体の知れないものに乗ってドイツから日本まで一万キロの距離をはるばると運ばれて来た実況放送を聞いたと言つて、そのときのマエハタの優勝の模様をアナウンサーの声まで真似て教室で再現してみせてくれた。その実況放送のなかで、アナウンサーは思わず「マエハタガンバレ」と言つてしまったそうだが、アナウンサーが「マエハタガンバレ、ガンバレ」と叫んでいるうちにほんとうにその女の選手は優勝してしまったのだ。優勝が決まったあとは、日章旗が上つて、君が代が鳴る。中田先生は教室で低声でだったがその君が代まで歌つてみせてくれた。べつに歌えと先生に言われていないのに、自然に何人かが立つて君が代を歌い出した。千登世もそのひとりだった。君が代のあと、柔道何段かで見ることになりしりした体格の中田先生は、円刈りの頭を大きくふつて満足げにうなずいて、「女もな、コクイハツヨウできる時代になつたんやで」と大声で言つた。千登世は「ハイ」と元氣よく心のなかで叫んだ。

正次は闇のなかで懐中電燈で千登世のオシッコの出るあたりを照らし出しながら、「おまえら女はあらへんのに、ようマエハタさん、勝ちよつたな」と千登世にはよく意味のとれないことを口に出した。「キンタマがあらへんかつたら、人間、力はあるのや。」千登世の耳に正次は口を押しつけて来た。とたんに千登世が思い出していたのは、昔、もつと小さかつたころ、戦争ごつこで「ショウジ、ショウジ、キンタマアラヘンショウジ」とよくみんながはやしたてていたことだ。そのころの正次は人一倍のグズのこわがりやで、走つてもすぐこけて泣き出すし、ちよつとした高みから飛び降りるのもこわ

がつていたので、よくそんなふうには馬鹿にされていたのだ。「シヨウジ、おまえ、それでも男か。キングタマあらへんのか」と戦争ごつこの隊長の健太郎に面とむかつて言われていたこともあった。

「おまえな。アベサダいう女知ってるか」と正次は千登世の耳に口を押しつけたまま押し殺した声で言った。「あいつは男の人殺して、ここ切つて持つていよつたんや。」正次は千登世の手を彼のズボンの前面のこんもりふくれ上つたあたりに当てさせた。

正次がそれ以上のことをしなかつたのは彼自身がそのあとどうしていいのか判らなくなつてしまつたのかも知れなかつたし、それ以上のことをする勇気がなかつたのかも知れない。それとも千登世のあまりな反応のなさに拍子抜けしてしまつたのか。そのあとすぐ正次は「さあ、もうこれで終りや」と奇妙に怯えたような声で言い、「こんなこと、誰にも言うたらあかんで」と千登世の手を自分のズボンから外させながら同じ怯えた口調でひと言つけ加えた。(こんなことて、何んや)と千登世は言い返しかけたが、一瞬のためらいがあつて言いそびれた。

四

「こんなこと、誰にも言うたらあかんで」を、もう一度、千登世は闇のなかで聞いていた。そのときにも正次は千登世の耳に口を押しつけて来ていて、千登世は正次の激しい息づかいと口から吐き出されて来る熱気を感じることができた。この「こんなこと、誰にも言うたらあかんで」もオリンピックピックに関係していた。オリンピックの最終日にマラソンに出場して優勝したソン選手についての話だ。「あのソン選手な、ほんまはチョウセンやで。三着になつたナンいうのもな、ほんまはチョウセン。」

「チョウセン」ということばに正次は調子をつけていた。そのあと、「こんなこと、誰にも言うたらあかんで」がつづいた。激しい息づかいと熱気が千登世の耳に入った。

いや、そのときには、もうひと言、正次は同じ低い押し殺した声でつづけていた。「おまえのところにいたおねえさん、チョウセンの男のや、あ、子おなかのなかにできていよつたんやろ。」そこまでひと息に言ったあと、正次はことばを切った。息を大きく吸い込み、そのあと一氣にことばを息とともに千登世の耳に吹き入れた。「そやからあのタイフウの日に井戸のそばで首吊りよつた。」

千登世が正次のことばでおどろいて夢から醒めた気持になったのは、その「事件」のことを思い出したからだけではなかった。そのときから二年ほどまえのことではしかなかったのに、「事件」そのもののことはおろか、あれほど好きだったし、大きくなつたらあんなふうになりたいと憧れてもいたおねえさんのことをすっかり忘れてしまっていたからだ。そのことにも、彼女は自分でおどろいていた。おねえさんはきれいな人だった。その記憶はあつた。いつもいい匂いがしていた。甘ずっぱい、その匂いを思い出すだけで、からだ全体があたたかくなって来る匂いだった。しかし、おねえさんのかんじんの顔かたちは、いくら努力してみても千登世の心の画面に浮かんで来なかつた。細面の顔の輪郭だけは思い描けたが、輪郭のなかは空白のまま残つた。

代りに心の画面に荒々しく出て来たのは、四天王寺の境内のサクラの花の白いつらなりだった。いや、そのつらなりのまんなかの黒い詰襟の学生服姿のアイさんの姿だ。荒々しく出て来たのは。アイさんはイセンの制帽をかぶっていた。おねえさんがヤクセンの学生なら、アイさんはイセンの学生だ。

健太郎に言わせると、アライさんはおねえさんとミツカイにやって来ていた。そのあと、おねえさんとアライさんは千登世をうまいことダシに使ってミツカイをくり返した。奈良へおねえさんに連れられて行ったときもそうだった。おねえさんが奈良へ連れて行ってくれると言うのでよるこんで出かけたなら、「連れが来るのよ」とおねえさんが何気ない言い方で言った。そう言われたときには千登世はアライさんが来るとつさに思ったにちがいない、奈良行のダイキの電車が出る上六の駅の改札口の人ごみのなかに背は高くないが頑丈なつくりのからだのアライさんが立っているのを見ても、千登世はおどろかなかつた。せつかくのおねえさんに連れられての奈良行に邪魔が入ったようでないやな気もしたが、アライさんはやさしい人だった。千登世に親切だったし、いろいろ面白いお話もしてくれたから、千登世はじきにアライさんを好きになつた。おねえさんのアライさんとのミツカイはもういやではなかつた。ときどき行きたくさなつた。

おねえさんにアライさんがはつきりとチョウセンの人だと判つたのは、いつのことだったのだろう。うすうすは感じていたのかも知れなかつたが、決定的にそうだと判つたのは、やはり、アライさんの病氣の見舞いに、そのつもりでおねえさんが千登世を連れてイカイノまで行つたときだったにちがいない。そのときまでおねえさんはアライさんがイカイノに住んでいたことは知つていても、それがどんなところか知つていなかったのだ。おねえさんが大阪の人なら、そうしたことは誰から聞いて知つていたかも知れなかつたが、おねえさんは姫路で生まれてずっとそこで育つた人だった。おねえさんがそのとき千登世を連れて行つたのは、やはり、ひとりですんな見知らぬところへ行くのが心細かつたのだ。

イカイノの通りのつづきの店のさまが千登世をおどろかせた。大きなブタのあたまがお店の台の上ののつていて、千登世をにらみつけた。上を見ると、足のついた大きなブタの胴体がまるごとぶら下がっている。そして、台のまえの桶には爪のついた切り口を見せていくつも台の上に並んだサカナは、どれもカナ屋さんだったが、真赤な血のついた切り口を見せていくつも台の上に並んだサカナは、どれもこれも千登世がこれまでに見たことがなかった得体の知れないサカナだった。店の男がおねえさんと千登世に何やらまくし立てたが、何を言っているのか、千登世にはまったく判らなかつた。おねえさんも判らなかつたらしくて、不安な顔をしていた。いや、あれはたしかに怯えた顔だ。

千登世は泣き出しそうになっていた。ふと気がついたら見知らぬ世界のまっただなかにいる。そんな感じがした。それとも、突然、眼のまえの壁が破れて、見知らぬ世界が眼のまえに出て来ている。その見知らぬ世界の住民のひとりが「アア朴^{バク}サンナ、コノアイタナ、オトウサンモ来テナ、イツシヨ二国ヘカエツタ」と奇妙な日本語でおねえさんに言った。アライさんの下宿のおばさんで、白いチョウセンの着物を着ていた。「国つて? ……」とおねえさんは口ごもりながら訊ねた。いつもハキハキした口のきき方をする、ときにはどんな男の人にもその口調で言い返したりするおねえさんはまるで人がかわったようにおどおどして見えた。「チョウセンヤナイカ。……チョウセンノサイシユウ島ヤ」と白いチョウセンの着物を着たおばさんはこともなげに答えた。「オカアサンノカラタワルインヤ。ソレテナ、二人シテ帰りハツタ。」

暑い日だった。暑い、暑い日。あれはたしか千登世がまだ小学校に入るまえ、幼稚園にいたころのことだったからもう五年以上も昔のことになるが、その日の暑さの記憶もよみがえって来た。

その年の幼稚園の夏休みに千登世はおねえさんの姫路の実家に行った。おねえさんの実家は大きなクスリの間屋だった。千登世の父親と母親はそこで働いているあいだに知り合つて、あとで夫婦めおとになり、千登世たち子供四人ができた。だから、その家にむかつては足を向けて寝られないと父親はよく千登世たちに言った。そやから、これだけあの人の世話しているんやありませんかと母親は不満げに言った。「あの人」とは、もちろん、おねえさんのことだ。

アライさんがチョウウセンのサイシユウ島からおねえさんを追いかけるようにして姫路にやつて来たのはそのときのことだ。おねえさんのおうちの裏山に千登世とおねえさんが二人して登つていたときにアライさんがだしぬけに現われて、アライさんのおかあさんが死んでしまったことを告げた。おねえさんはいちおうはお悔みを口にしたが、そのあとは、アライさんがウソをついていたと言つていさかいをした。アライさんがチョウウセン人だということを隠していたというのだ。「うちはあの人アライさんがウソをついてどうのこうのと言うのやない。うちはね、ウソをつく人が嫌い。嫌い、大嫌い。」あとでおねえさんは千登世に言った。おねえさんの眼にナミダがいつぱいにたまつていた。

それでもまたいつのまにかおねえさんとアライさんはミツカイをし始めていた。それは千登世もおねえさんに何かと言えばダシに使われてミツカイの仲間入りをさせられたことだ。しかし、ミツカイをつづけて行くと、おねえさんのおなかのなかにやあ、子がでける——健太郎がそう小声で千登世の耳にささやいた。そして、ことは健太郎のことば通りに進んだ。そのあたりから事態の推移は千登世の理解を超えていて何がどうなつたのかよく判つていないのだが、アライさんとのミツカイをつづけた

あとや、あ、子がおなかにできてしまったおねえさんはアライさんと結婚しようとした。しかし、アライさんがチョウセン人なのでうまく行かない。そのころミツカイでリンケンに出合つて二人がケイサツにつかまつたりして、二人の仲は割かれる。あげくのはてにおねえさんはいよいよオカヤマへおヨメさんに行くのだが、たしかもうそのときにはおねえさんのおなかのや、あ、子は死んでしまつていた。それでも、おねえさんはアライさんのことがあきらめきれない。それでついにおねえさんはオカヤマの家を出てサイシュウ島まで行つたのだが、アライさんはもうすでに気が狂つてしまつていた。どこへも行きようも帰りようもなくなつたおねえさんは千登世の家へ来たのだが、長くはおれなかつた。千登世が憶えているのは、「明日は必ず帰りますから、もう一日だけ、木村さん、ここにいさして下さい」と千登世の父親に必死に頼んでいたおねえさんのことばだ。

その明日が、千年以上も倒れずに立つていた天王寺の五重塔が倒れた台風が来た日だ。今はその台風は「室戸台風」という名で呼ばれるようになっていて、千登世もその名前でその日のことを思い出すようになっていたが、傘もささずに全身ズブ濡れになつた健太郎が学校から帰つて来てやにわに「天王寺はんの五重塔が倒れたで。倒れたで」と上ずつた声で叫んだ。あと兄が何を言つたのか、千登世は憶えていないが、「天王寺はんの……」と言ひ返しかけたことは記憶している。それからさらに兄が「ようけ人が下敷きになつて死によつたみたい」とふるえ声で言つたことも憶えていた。

そのあと千登世が雨合羽をひつかぶつて外へ出て行つたのは、さらにそのあとに千登世が見る光景にぶち当たることを直感したからだつたのか。外に出たとたん千登世の小さなからだを吹き飛ばすように吹き当つて来た風に全身で抗しながら懸命に歩いて近くの井戸にまで来たとき、井戸へ入る路地

の入口の大きなクスノキの枝に白いものがぶら下っているのが見えた。そして、それは千登世の眼のまえで、あたかも千登世の注意を喚起するようにぐるりと動いた。「チイちゃん。」白いものは言った。千登世にはそのおねえさんの声を聞いた感覚がまだ耳の底に残っている。おねえさんはクスノキの枝に細引きで首をひっかけて自らくびれていた。

五

このあいだ、「あれ、何んや」と市電のなかで言い出したのは、来年から千登世の小学校に来ることになっていて、「やあい、来年はあんたはうちの学校の一年坊主」と同じ小学校に通う、いつもイケズな妹の良子にからかわれている弟の文雄だった。千登世はもう五年生になっていた。良子は三年生。文雄は最上級生だがまだ幼稚園だから、「二年坊主」より下だ。「何んや、あんたは知らなかったんかいな。あれはムロト台風のとき死にはった先生や生徒のタマシイを祀ってはるとこや」と良子はおかさんと自分のあいだにはさまって坐った文雄に言った。いや、それから彼女は人一倍大きいオカッパ頭をくるりと勢いをつけて千登世をふり返った。「なあ、おねえちゃん、そやろ。おねえちゃん、あの日、ようけあちこちで校舎が倒れて死にはったんやろ」と言ってから、「おねえちゃんは死んでよかったな」とイケズな良子はつけ加えた。何かこましゃくれた口調での言い方で、まるで千登世が死なないでわることかたみだいだ。「あの日、おねえちゃんは学校、ズル休みしていたんやろ。」良子は文雄をふり返った。「それで、おねえちゃん、校舎の下敷きにならんと助かりはった。」いつそうイケズな口調は強くなった。

ズル休みをしたのではなかった。千登世はほんとうにその日ぐあいがわるかったのだ。夏かぜをひいていて、おかあさんも、「今日は風がきついから、休んでおき」と言ってくれていた。おフトンを敷いてちゃんと寝ていた。しかし、そのおかげで死なないですんだ。それもたしかなことだ。

健太郎は、倒れた校舎がミシミシ音をたて始めたところで、先生が、今日は学校は終り、すぐ帰りなさいと言ってくれてみんなして帰宅したらしいが、なかにはそのまま教室にぐずぐず残っていたのも、何も教室に置き去りにして帰宅したらしいが、なかにはそのまま教室にぐずぐず残っていたのも、いったん外へ出たもののランドセルを取りに帰ったのもいて、その子供たちは大きな音をたてて突然崩れ落ちた校舎の下敷きになった。先生もひとり死んだ。

「あんたはこわがって泣いてばかりいたんやで」と千登世は良子にやり返した。できるかぎりイケズに言った。その日の朝のことだ。おかあさんが敷いてくれた寝床のなかに入って千登世は懸命に眠ろうとしたが、風の音が強くて、こわくて眠れない。そのうち風はどんどん強くなって、家も激しく揺れ動くようになった。千登世は泣き出ししかかっていたが、泣きそびれてしまったかたちでフトンをひっかぶってただ黙り込んでいたのは、良子がさきに泣き出していたからだ。「こわい、こわい」と言いながら、良子はおかあさんの膝にとりすがって泣いていた。しかし、文雄はまだ小さくて事態の重大さかげんがかいもく判つていなかったにちがいない、平気で隣りの部屋でひとりで積み木細工をしていた。

考えてみると、もうそのときごろにはおねえさんはクスノキの枝に細引きをかけていたのかも知れない。そう思うと千登世はこわくなって、「そやけど、もうみんなそんなことは昔の話」と一切のそ

の日の記憶を心のなかから追い出すようにわざと明るい声を出した。市電はもうそのときには丈の高
いお墓のようなイレイ塔のまえを通り過ぎて、バンバ町の交叉点まで来ていた。「あそこに死んだ人
埋めてあるんか」と文雄はしつこくイレイ塔にこだわる質問を口に出したが、「あんなところに埋めて
あるかいな。あのね、日本はお葬式は火葬でやりますんや。火葬にして、骨を拾うて、お墓に入れは
る」と良子がませた説明で文雄を黙らせてくれた。

「まあ、うちは、誰もケガひとつせんでよかつたんよ」と交叉点で停まっていた市電がまたにぎやか
に音を出してのろのろ動き出して放送局のまえを通り過ぎたあたりで、それまで黙っていたおかあさ
んが口をきいた。「あれで健太郎がランドセルなんか持って帰ろうと思うてぐずぐずしていたら、あ
の子も死んでまりましたで。あのときやつと生命助いのちかつたのに、何思うて、少年飛行兵みたいなこわ
いものになりはったんやろ。」おかあさんはいつもぶつぶつ口のなかで言っていることを今も市電の
なかでつづけた。このおかあさんのグチに言い返したのは、そんなとききまっておかあさんに逆らっ
てみせるイケズの良子ではなく、いつもは素直でおとなしい、その評判の文雄だった。「おかあちゃ
ん、何のんきなこと言うてるねん。去年から日本は支那と戦争しとるんやで。おれもな大きなつたら、
兄ちゃんみたいに少年飛行兵になって、お国のためにつくすんや」と怒った声で威丈高に言った。千
登世は一瞬、イケズな良子が「そんなえらそうなこと言うて、便所に夜中ひとりで行かれへんような
寝小便ばかりやっているボンに戦争なんか行かれるんか」と言い出すかと思つたが、逆に良子は「そ
やで、日本は今、支那と戦争してますねんで。非常時やで」とおかあさんを叱りつけるように言った。
千登世も「そうやで、おかあちゃん、非常時やで」と同じことばを口に出した。「しつかりせんといかん。」

ことばが自然につづいた。

六

千登世の五年生になつての新しい担任の先生は「非常時先生」だった。もちろん、そんな名前があるわけではない。アダ名が「非常時先生」だった。ほんとうの名前は栗山茂。

アダ名の由来は、栗山先生が何かと言え、今、日本は非常時だ」と言つたからだ。最初からそうだった。

新学年の始業式に組替えが発表されて、千登世が決められた教室に半分ほどがあまり知らない新しい級友たちと待っていると、メガネをかけて痩せぎすだったが、全体がキビキビした感じの若い先生が入つて来て、教壇につくなり、「みんな、よく聞けよ、これからのみんなの先生はわたし、この先生だ。先生の名前は……」と元氣のよい声を出した。それだけでもみんな——そう新しい若い先生に言われた千登世たちは氣をのまれたが、それだけ言うと、先生はクルリと身軽な動作でみんなに背を向けて黒板に白墨で大きく「栗山茂」と書いた。大きな漢字三文字で、今まで千登世は先生がこんな大きな文字を黒板に書いたことがないような氣になった。漢字を書いたあとは、「くりやましげる」とこれも大きな文字でふり仮名をつけた。「栗はくり、みんな、栗が好きやろ。その栗。」先生はまた元氣のよい声を出した。少しかん高かったが、元氣に満ちあふれたいい声だ。そう千登世は思った。千登世ばかりではなかった。五年生でいっしょの組になつて新しく隣りの席になつたキヨちゃん——片山清子もそのときそう思ったと、あとで親しくなつてから千登世に打ち明けた。「山はやま、これは、み

んな、誰でも知ってる。」栗山先生は大声をつづけた。「知らん人いたら、手をあげてみイ。」手をあげるのはいなかった。みんなは笑った。「茂はしげる。先生の名前、栗山は苗字、名前は茂。みんな、いいかな、苗字と名前の区別、判ってるかな。茂は、木がしげる、草がしげるのしげる。木が枯れる、草が枯れるのと反対。先生はまだ若い。まだ枯れる年じゃない。これからぐんぐん伸びる、しげる。」

みんなは笑い出していた。元気のいい、面白い先生だ。笑い声のなかにそのみんなの気持が出ていた。笑いながら、千登世は、ついこのあいだ、おかあさんがおとうさんに、誰から聞いて来たのか、今度千登世と良子の学校にシハン学校でよくできた、その上元氣ハツラツとした若いハリキリ先生が転任して来るといふ話をしていたのを思い出していた。その先生はきつとこの栗山先生のことだと千登世は千登世のも入れてのみんなの笑い声が終わったときにははつきり決めていた。先生はみんなの笑いが鎮まるのを待つて、黒板いっぱい自分の自分の文字を黒板拭きで丁寧にしたあと、また大きく文字を書いた。今度は千登世たちに背を向けてではなかった。横向きに千登世たちみんなを見わたすようにして見ながら、また元氣よく書いた。白墨の文字三文字が黒板に鮮かに残った。「非常時」。栗山先生はまた大きくふり仮名をつけた。「ひじょうじ」。書き終るとすぐ、「みんな、判るかな、今、日本は非常時だ」と指にはさんだ白墨で三つの漢字を順に音をさせて叩きながら、かわらず元氣のよい声で言った。「ひじょうじ」の発音に弾みがついていた。「みんな、判るかな、非常時というのはいね、おうちが火事になる、どこかで地震が起こる、敵が攻めて来る……これはみんな非常時だ。」弾みのついた言い方で栗山先生はつづけた。「ひじょうじ」といふことばひとつが全体に弾みをつけた。千登世も自然に「ひじょうじ」——そう心のなかで言った。言い方に弾みがついていた。

「支那がわるいことをする、いいや、支那全体、支那人全体がわるいのやない。支那人のなかには、わるい人もいる。みんな、判るかな、そのわるい人が、なんとかしてこの東洋に平和をつくり出そうとしている日本に歯むかつてわるいことをしようとしているんだ。こういうわるい人はやつつけるよりほかにしようがない。みんな、いいかな、それが今度の支那相手のいくさだ。そのわるいのが軍隊使うて日本に歯むかつてる。支那人の軍隊は弱い。日本はまだまだかつて負けたことのない国だ。支那の軍隊は、日本の軍隊、皇軍の敵になるようなもんじゃない。しかし、みんな、判るかな、支那は大きな国。日本の何倍もある大きな国だ。去年のくれ、支那の首都……日本の東京みたいな南京。あれが皇軍の手に落ちた。みんな、憶えているやろう。チョウチン行列があちこちであつたな。しかし、その南京だつて、支那全体から見ると、まだはしのほうにある。いくさに勝つためには支那全体をやつけないかん。今、日本は大きな、大きないくさをしとるんだね。この大きな、大きないくさに勝たんとならん。大きな、大きないくさに勝つために、日本は自分もつ力を全部出さんといかん。みんな、判るかな、日本が今非常時だということが。」

みんなは「ハイ」と応じた。最初に言い出すのがいて、それがすぐみんなの「ハイ」になつた。最初に言い出したのが、隣の席にいたキョちゃん——片山清子だつた。負けじと千登世は「ハイ」と声をはり上げた。おそらく、その瞬間だつた、栗山先生の「非常時先生」というアダ名が決まつたのは。もちろん、そのあと先生が何かと言えば、「今、日本は非常時だ」と言い出すことがあつた。しかし、その最初のみんなのいつせいの「ハイ」のときに、みんなの心のなかでそう決まつていた。そう千登世は決めていた。

キヨちゃんは利発な子だった。え、え、の娘でもあった。

「利発な子」だと言ったのは、千登世のおかあさんだった。何んでそう決めたのかは判らなかつたが、授業参観に来たあとで、おかあさんはそう千登世に言った。「非常時先生」の質問に対する受け答えがおかあさんにそう思わせられたのかも知れなかつたし、授業のすんだあと、キヨちゃんが自分でおかあさんのまえに来て、「わたし、片山清子と申します。チイちゃんの友だちです」と大人びた口調でキパキと自己紹介をやつてのけたせいだったかも知れない。いや、たぶん、両者だ。「チイちゃんにはあんなことでけへんやろ」とおかあさんは言った。千登世は黙り込んだが、それは、もちろん、おかあさんのことが当つていたからだ。

キヨちゃんがえ、え、の娘であることは、組のみんなが言つていたことだ。キヨちゃんのおとうさんは大阪市の市役所の課長さんで、たいしたえらいさんではないし、え、え、でもない。そう千登世のおかあさんも言つていた。千登世の学校の近くの電車道にひと並び並んでたつ市役所のお役人の家のひとつにキヨちゃんの一家は住んでいて、そのひと並びのいっとう大きいお屋敷のかまえのが局長さん、次の少し小さいのが部長さん、三番目のキヨちゃんの課長さんがさらにもう少し小さくなつて、それが二つあつて、あと三つ、もつと小さいのが係長さん——というぐあいには右から順にえらいさんから下へお役人の家が並んでいた。「うちはまんなか。えらくもなし、えらくなくもなし。」キヨちゃんはこのわりないサバサバした言い方で言つた。たいしたえ、え、でないことは、その「まんなか」の家

に遊びに行つて判つた。キヨちゃんのおかあさんは上品に澄まして奥座敷に坐っている、えい、えい、ということばで千登世の眼に自然に浮かんで来たそんなおかあさんではなかつた。最初に行つたのが夏だつたので、色あせたアツパツパを着て、女中がひとりいるのに自分で氷を持って来てくれたのが千登世の記憶の画面に強く刻み込まれている。おかあさんはそのあと気さくに「チイちゃんの家はクリ屋さんやつて。今度クスリいるとき、買いに行くわね」と声もかけてくれた。えい、えい、のおかあさんが澄まして坐っているはずの奥座敷には、洗濯物がいつぱいに散らかしてあつて、そんなえい、えい、のおかあさんが上品に澄まして坐る場所はなかつた。キヨちゃんのところも千登世同様四人きょうだいだつたが、女はキヨちゃんひとりで、あとはみんな男だ。キヨちゃんは上から三番目で、上の二人はどちらも中学生で、中学生は暴れるから洗濯物はことに多い。そんなふうにはキヨちゃんも言つたが、そのあと、「チイちゃんとは、お兄さんはいはれへんの」と訊ねた。千登世は「いる」と応じてから、「そやけど、今、兵隊さんの学校に行つてはる」と言つてから、もうひと言、「少年飛行兵や」とも言つた。最後のことばで自然に口調がたかぶつたが、キヨちゃんは「ふうん」と気のいい相槌を打つただけだつた。「少年飛行兵」が何んなのか、知らなかつたにちがいない。

それでも千登世は片山清子——キヨちゃんが好きになつていた。キヨちゃんはいつもさつぱりとしたものの言い方をした。それが千登世の気に入つていたのかも知れない。ものおじしな思つたことを言うし、したいことをする。そんな感じがキヨちゃんにはあつて、千登世は好きだつた。思つたことを口にすると言つても、妹の良子のようにイケズな感じはなかつた。もつとさつぱり、サバサバして、あとをひかなかつた。

授業のときも、キヨちゃんは判らないことがあると、遠慮しないで手をあげて質問をした。判らないと言うよりは、納得できないときだ。「非常時先生」が「今、日本は非常時だ」の口癖のあと、「国難」ということばを使って同じ事態を説明した。いつものように「国難」を大きく黒板に白墨で書き、「こくなん」とふり仮名をふつてからのことだ。「みんな、いいかな。日本には、今、こくなんが襲つて来ているんだよ。」先生はその舌を噛みそうなことばを自分でも言いにくそうに使つて言った。「国はこく、くにのことだ。難はなん、さいなんのことだ」と先生は、自分の名前を説明したときと同じような言い方をした。「こくとなん、二つづけてこくなん。つまり、日本というくにがえらい災難に出合っている。」先生は、昔の「こくなん」——「元寇」の話をした。蒙古の軍勢が海を渡つて九州に攻めて来た。そのときの話だ。「元寇」も「蒙古」もまた大きく先生は板書した。ふり仮名もつけてくれた。蒙古はそのとき世界の四方八方に攻め入っているんな国の人間をひどい目にあわせて来たのが、ついには、わが日本にまで攻め入つて来ようとした。まさに「こくなん」——「国難」が来たのだ。栗山先生は白墨で黒板のその二文字を叩いた。

そのとき蒙古の軍勢は日本より優勢の軍勢だった。しかし、日本の軍勢もひるんではいなかった。「国難」来たれりと、日本人みんなの気持は定まり、固まった。そして、その気持が天に通じたにちがいない、蒙古軍がまさに九州に出撃したときに「神風」が吹いた。これこそまさに日本が「神国日本」であるというあかしになることだが、この強力な「神風」の助けもあつて、ついに日本は蒙古の襲来——「元寇」を撃退することができた。栗山先生——「非常時先生」はそう早口にまくしたてるようにしゃべりつづけながら、「神風」「神国日本」のふた並びの漢字を黒板にさらに書き加えた。どれもこれも大

大きく書き、ふり仮名もつけた。おかげで教室の壁の三分の二を覆うほどの大きな黒板は先生の白墨の文字であらかたいっぱいになった。

「みんな、判ったかな。その元寇のときも国難やったけど……」先生は文字を書き終ると、ゆつくり語調をゆるめて言った。「今の非常時の日本も国難にたちむかつとる。だから、みんな、しつかり……」先生はそのあとを「せんといかん」とつづけようとしていたにちがいない。千登世もそうすでに先生のことばを引きとつて耳で聞いていたような気がしていたが、キヨちゃんが先生のことばの途中で手をあげた。「先生、質問があるんやけど……」手をあげたばかりではなかった。そうキヨちゃんのはつきり声をはり上げて言った。「質問していいですか。」彼女は同じ口調でつづけた。

栗山先生は軽くうなずき、キヨちゃんはすぐ立ち上つてハキハキした言い方で質問を口に出したが、千登世が彼女のことばの途中で先生の顔をまじまじと見たのは、キヨちゃんの質問の中身に千登世がおどろいてしまったからだ。おどろいてしまったと言うよりは、質問してはいけないことをキヨちゃんがきいている——何かそんな感じだった。そんな感じで、千登世は思わず先生のメガネをかけた、若々しい顔つきの顔を見た。

「先生は国難が来たと言いはつたけど、蒙古の襲来のとぎとちごうて、何も支那軍は日本を攻めに来てはらへんのとちがうんですか。支那軍は弱いよつて、そんな力はあらへん。支那軍は弱いといつも先生は言うてはるし、うちもそう思うんやけど、先生、うちの考えていることまちがいですか。」

キヨちゃんはよどみなくそうひと息に言つてのけてからボタンと音をさせて勢いよく坐つた。彼女のことばの途中でそれまでざわついていた教室のなかが急に静かになつてしまったのは、千登世同様、

みんながキヨちゃんの質問の中身におどろいてしまったのではないか。きいてはならないことをきいてしまっている。そんな感じでしたからではないか。みんなはいつせいに先生——「非常時先生」を見た。

「非常時先生」がキヨちゃんの質問に答えて口を開くの少しの時間がかかったのは、やはり、キヨちゃんの質問が先生にも思いがけないものであったにちがいない。千登世はとつきにそう思ったが、それでもすぐ先生は、「片山、きみの考えていることはまちがっていないよ」と微笑しながらことばを返した。「支那は弱い国だよ。心配せんでも日本に攻めて来る力なんかない。」千登世をおどろかせたのは、先生のことばではなかった。先生のことばにおおいかぶさるように「あーあ、それならよかった」とキヨちゃんは大声を出して、そちらのほうが千登世をおどろかせた。おどけて言っているのではなかった。ほんとうに「よかった」という気持がキヨちゃんの方に出ていた。ただ、それでいて、全体がおどけた感じになっていた。みんなは笑い出した。千登世も笑ったが、自分にはできない。そうも思っていた。何か口惜しい気持だ。

「ただな、みんな、いいかな。支那はまえにも言ったが、とてつもなく大きい国だ。大きい国とのいくさに勝つのは、たいへんなこととちがうか。だから、今、日本は非常時だ。みんな、いいかな、日本は国難に出合っている。」

そう言いながら、いつもの口癖を出した「非常時先生」は黒板拭きで黒板にそれまで書いた文字をすべて丁寧に消してから、「国家総動員法」と見慣れぬ漢字をまた大きく書いた。ふり仮名は「こっかそうどういんほう」だ。ふり仮名を丁寧に漢字のひとつひとつにつけ終ってから、その舌を噛みそ

うなふり仮名のことばを言いにくそうに一音一音区切るようにしながらゆつくり口に出した。

「これはな、みんな、いいかな、今年の四月にできた法律……法律いうのはぼくら国民がやることのみまりやが、これが決まった。ひと口に言うたら、この日本という国家、くが持つているものすべてを動かして、それを根こそぎ使うて、この支那とのいくさに勝つ、勝たんといかんという法律や。」

先生はたかぶった口調で言った。いや、しゃべっているうちに、自然に言い方がたかぶって来た。そんな感じだ。千登世の心もたかぶって来ていた。しかし、同時に不安にもなった。国にあるものすべてを持ち出して、それを動かして勝つ、勝たんといかんということは、そうまでしないと勝たないということでもある。それは、勝たなければ、負けるということでもある。ほんとうにそうなのか、と千登世は先生に訊ねたい気になった。しかし、訊ねる勇氣はなかった。はじめからそれは訊ねてならないことだ。たぶん、そうだった。千登世はまたキヨちゃんが訊ねてくれないかと思った。その気持で隣の席のキヨちゃんの円くふくれ上った顔を見たが、彼女は何も言わなかった。一心に先生の「国家総動員法」の話に聞き入っているように見えた。

つづきは製品版でお読みください。